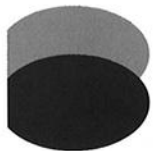


絵本学会10周年記念

2007年第10回絵本学会大会

絵
本
と
表
現



絵本学会 10 周年記念

2007 年第 10 回絵本学会大会

“絵本と表現”

2007 年 6 月 30 日 [土] ・ 7 月 1 日 [日]

| 会場 | 武蔵野美術大学

187-8505 東京都小平市小川町 1-736

| 主催 | 絵本学会

| 共催 | 武蔵野美術大学 [芸術文化学科 / 美術資料図書館]

| 後援 | 朝日新聞社、株式会社 雄松堂書店

第10回絵本学会大会実行委員会

大会実行委員長	今井良朗	(武蔵野美術大学芸術文化学科教授)
大会事務局長	本庄美千代	(武蔵野美術大学美術資料図書館事務部長)
大会実行委員	米徳信一	(武蔵野美術大学芸術文化学科准教授)
	河野通義	(武蔵野美術大学芸術文化学科助手)
	申明浩	(武蔵野美術大学芸術文化学科非常勤講師)
	前沢明枝	(武蔵野美術大学芸術文化学科非常勤講師)
	畠山紀美代	(武蔵野美術大学芸術文化学科非常勤講師)
	竹迫祐子	(武蔵野美術大学芸術文化学科非常勤講師)
	村井威史	(武蔵野美術大学美術資料図書館)
	小林由佳子	(武蔵野美術大学職員)

大会運営スタッフ

武蔵野美術大学芸術文化学科

	亀井優希	(武蔵野美術大学芸術文化学科助手)
	山田毅	(武蔵野美術大学芸術文化学科助手)
	阿久津朋子	(武蔵野美術大学芸術文化学科教務補助)
	清水真沙美	(武蔵野美術大学芸術文化学科教務補助)
	馬屋原晶子	(武蔵野美術大学芸術文化学科教務補助)
	渡辺真太郎	(武蔵野美術大学芸術文化学科教務補助)

武蔵野美術大学芸術文化学科学生

大学院	齋藤玲子
4年生	近藤亜実・瀬古春佳・長谷川由華
3年生	岩上恵里子・片岡智子・國松智美・正田美沙子・須田理恵子・瀬野はるか・関野真悠 高橋誠・高橋清紋・中野可南子・中牧まどか・中村絢・松尾和登
2年生	加藤美幸・佐藤芳枝・竹内那美
1年生	上島瞳・小野綾乃・小林西・高橋久美子・緑川彩

書籍販売ボランティア

	柴田千絵	(武蔵野美術大学美術資料図書館)
	河田才佳・日田さつき・網千彩	(武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科3年)
	加賀谷麗美	(武蔵野美術大学デザイン情報学科3年)
	桜井雄一郎	(武蔵野美術大学基礎デザイン学科4年)

協力

	篠原規行	(武蔵野美術大学映像学科教授)
	沢田雄一	(武蔵野美術大学美術資料図書館)
	黒澤誠人	(武蔵野美術大学美術資料図書館)

2007年第10回絵本学会大会プログラム

編集	第10回絵本学会大会実行委員会
デザイン	河野通義
発行	絵本学会
発行日	2007年6月30日

絵本学会の10年

編集	竹迫祐子
デザイン	河野通義
発行	絵本学会
発行日	2007年6月30日

第10回絵本学会大会実行委員会事務局

武蔵野美術大学芸術文化学科研究室
〒187-8505 東京都小平市小川町1-736
TEL: 042-342-6712

第1日 6月30日[土]

- 12:30 - | 受付 |
- 13:00 - | 開会式 |
- 13:30 - | 講演 | 絵本表現の方法論 (1)
講師：ドゥシャン・カーライ (作家 / プラティスラバ美術大学教授)
通訳：小野田若菜
- 15:20 - | 講演 | 絵本表現の方法論 (2)
講師：長谷川集平 (作家 / 京都造形芸術大学客員教授)
- 17:00 - | 絵本学会 2007 年度総会 |
- 18:00 - | 交流会 | 於談話室 MAU (12 号館 8 階)

第2日 7月1日[日]

- 9:00 - | 受付 |
- 9:20 - | 研究発表 | A 室 - 9 号館 205 講義室 / B 室 - 9 号館 206 講義室
- 12:20 - | 昼食・休憩 |
- 13:00 - | 作品発表 | A 室 - 9 号館 205 講義室 / B 室 - 9 号館 206 講義室
- 15:00 - | ラウンドテーブル |
- R1 「絵本教育の現場から」 9 号館 206 講義室
- | | |
|---------|-----------------|
| 話題提供者 | 笹本純 (筑波大学) |
| | 佐藤博一 (京都造形芸術大学) |
| | 今井良朗 (武蔵野美術大学) |
| コーディネータ | 申明浩 (武蔵野美術大学) |
- R2 「絵本表現の現場から」 9 号館 205 講義室
- | | |
|---------|---------------------------------|
| 話題提供者 | ドゥシャン・カーライ (作家 / プラティスラバ美術大学教授) |
| コーディネータ | 松岡希代子 (板橋区美術館) |
- 17:00 - | 閉会式 |

展覧会 - 美術資料図書館

「ムサビと絵本 - 絵本の表現」 武蔵野美術大学美術資料図書館 1階展示室

「現代のしかけ絵本」 武蔵野美術大学美術資料図書館 2階展示室

「ドゥシャン・カーライ作品展」 武蔵野美術大学美術資料図書館 1階石膏陳列室

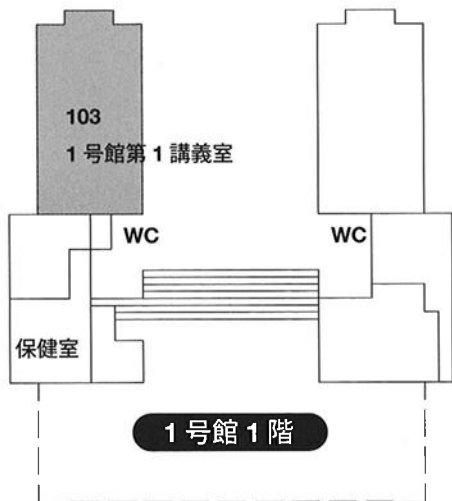
サイン会：長谷川集平 会場：美術資料図書館ピロティー

絵本学会刊行物、関連書籍の販売 会場：美術資料図書館ピロティー

※絵本学会の公式プログラムではありませんが、6月30日(土)10:40-12:00まで、

「ムサビと絵本 - 絵本の表現」展に関連したアーティスト・トークを開催します。

講師：長谷川集平 会場：美術資料図書館 1階展示室



1日目会場

12:30 - | 受付 |

13:00 - | 開会式 |

13:30 - | 講演 | 絵本表現の方法論 (1)

講師：ドゥシャン・カーライ (作家 / プラティスラバ美術大学教授)

通訳：小野田若菜

15:20 - | 講演 | 絵本表現の方法論 (2)

講師：長谷川集平 (作家 / 京都造形芸術大学客員教授)

17:00 - | 絵本学会 2007 年度総会 |

美術資料図書館

1号館

2号館

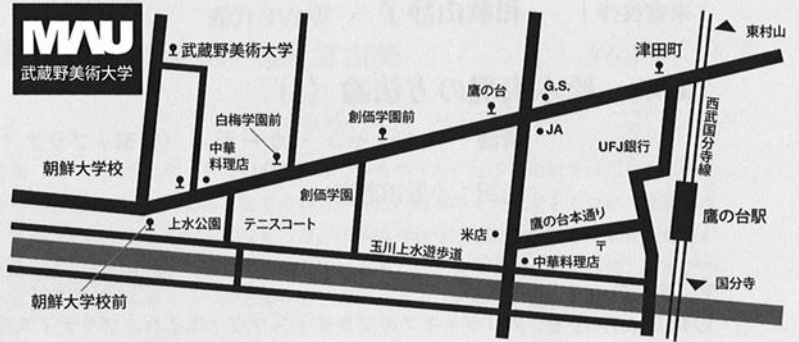
正門

地下1階
自動販売機

自動販売機

会場への交通案内

1. JR中央線国分寺駅乗換、西武国分寺線(東村山行)2つ目鷹の台駅下車徒歩約20分
 2. JR中央線国分寺駅北口下車徒歩3分、
西武バス国分寺駅北入口発武蔵野美術大学または小平営業所行、武蔵野美術大学下車
 3. JR武蔵野線利用の場合は、西国分寺駅で中央線(東京行)に乗り換え国分寺駅で下車
上記1.または2.の経路を利用。または、新小平駅よりタクシーで10分
- ※東京駅からはJR中央線快速、国分寺駅下車。上記1.または2.の経路を利用してください。



交流会会場

1日目 (8階談話室 MAU)

昼食会場

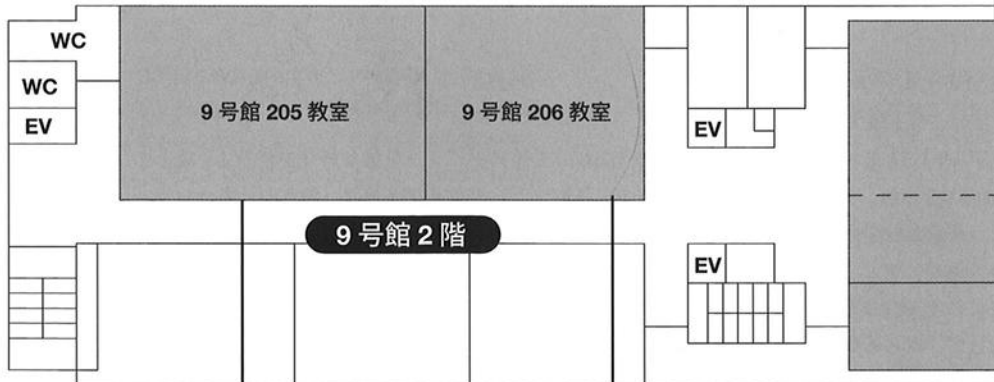
2日目 (地下1階学生食堂)

12号館

2日目会場 9号館 210・211教室

9:20- | 作品発表作品展示場所 |

9号館



2日目会場 9号館 205教室

9:20- | 研究発表A室 |
13:00- | 作品発表A室 |
15:00- | ラウンドテーブル R2 |
17:00- | 閉会式 |

2日目会場 9号館 206教室

9:20- | 研究発表B室 |
13:00- | 作品発表B室 |
15:00- | ラウンドテーブル R1 |

開会式

- | 開会宣言 | **佐々木宏子** 絵本学会会長
| 開催校挨拶 | **甲田洋二** 武蔵野美術大学学長
| 来賓挨拶 | **和歌山静子** WAVE 代表

| 講演 | **絵本表現の方法論 (1)**

講師：ドゥシャン・カーライ (作家 / プラティスラバ美術大学教授)

通訳：小野田若菜

◆ドゥシャン・カーライ

1948年6月19日、スロヴァキアのプラティスラヴァ生まれ。プラティスラヴァ美術大学で、ブルノウスキーに師事、絵画、グラフィックデザインなどを学ぶ。絵本、グラフィック、版画、タブロー、アニメーション制作など多方面で活躍。プラティスラヴァ美術大学の教授としても多くの学生の指導を熱心に行い、東欧での中心的存在となっている。

ポーロニャ国際絵本展の審査委員も務め、絵本は、プラティスラヴァ国際絵本ビエンナーレ (BIB) で '73年と '75年に「金のリング賞」を '83年には『不思議の国のアリス』で「グランプリ」受賞。'83年「国際アンデルセン賞」、'92年「ユニセフ賞」など多数の賞を受賞するなど、国際的にも高い評価を受けている。幻想的で緻密に構成されたイラストレーションは、カーライ氏の奥深いファンタジーの世界を具現化したものであり、画面の展開と構成の手法は理論的にも独自のものとして表される。

「絵本表現の方法論」をテーマに絵本の表現性について、ご自身の作品を中心に表現の発想と方法の背景について語っていただく。

| 講演 | **絵本表現の方法論 (2)**

講師：長谷川集平 (作家 / 京都造形芸術大学客員教授)

◆長谷川集平

1955年兵庫県生まれ、武蔵野美術大学中退

作家、ミュージシャン、京都造形芸術大学客員教授

1976年『はせがわくんきらいや』(76年第3回創作えほん新人賞)において作家デビューを飾り脚光を浴びる。続いて『とんぼとりの日々』(77年)『トリゴラス』(78年)を出版。『絵本づくりトレーニング』(88年)と、姉妹編でもある『絵本づくりサブミッション』(95年)は、絵本表現の仕組みや基本、画面の展開と構成を指す「モンタージュ論」について平易に解説した指南書となっており、今日でも絵本づくりのバイブル的な一冊である。デビュー以来、最新作『ホームランを打ったことのない君に』(06年) (07年第12回日本絵本賞受賞)まで、およそ100点におよぶ絵本作品や絵本に関する評論、理論書等を著す。そして、「絵本は全人格をかけて臨むべきものである…」と語り、実作を通して「絵本モンタージュ論の過去、現在、未来」をテーマに一貫した独自の絵本論を展開している。91年以降、活動拠点を長崎に移す。06年、祈りの丘絵本美術館 (長崎市大浦) で開催した個展「サルコーダ・ナガサキ」では絵画作品を展示し新たな表現活動を展開する。

「研究発表プログラム」

ましませつこの作品に見る伝承世界の軌跡 —わらべうたとこぐま社との出会い—

廣田真智子・中川亜沙美・西脇由利子・丸尾美保・万本光恵・渡辺万由美
—こぐま社絵本研究会

ましませつこは『わらべうた』（『こどものとも』117号 1965 福音館書店）で商業デザイン界から絵本の世界に登場し、伝承としてのわらべうたの絵本表現に新境地を拓いた。同時期にはグラフィックデザイナーの旗手、亀倉雄策が日本のデザインについて「伝統を一度分解して、新しく組み立て」、「KATATIの世界性、KATATIの風土性」（『亀倉雄策』亀倉雄策 DNP グラフィックデザイン・アーカイブ 2006）を唱え、1951年に日本宣伝美術会を設立していた。ましませつこもそこに所属していた。

処女作『わらべうた』を描いた個人的な動機は、学生時代に帰郷した折、山形県鶴岡で再認識した「わらべうた」のメロディーや蔵の中にしまわれていた子ども時代の着物の柄や色彩にみた美しさの再発見がある（『わたしの絵本とわらべうたへの想い』ましませつこ講演・高槻市・2006）。そのイメージで描きためていた一連の絵が松居直によって絵本となった。「わらべうた」採集や研究、またわらべうた運動が盛

んになったこの時期には「わらべうた」絵本が出版されだした頃であるが、これら従来のわらべうたの絵本のイメージをくつつがえす新しさがこの絵本にはあった。伝承の「わらべうた」と日本の着物や亀倉が賞賛するシンプルで象徴的な美しさを持つ紋や文様を駆使し、のびやかでソフトな平面フォルムのデザインで美しい色彩のわらべうた絵本を展開した。

ましませつこはこの福音館の『わらべうた』絵本を出発点に、子ども時代を回顧した創作絵本、またコンスタントに取り組んだ伝承・行事絵本、そしてことば遊びや詩の絵本など試行錯誤の時期を経て、再び現在はこぐま社で「わらべうたえほん」に挑戦している。それらに表現された伝承世界と子どもの世界、そしてこぐま社と絵本づくりの関係を表現技法や絵本創作への視点をさぐりながら彼女の絵本表現の変遷を分析する。

絵本「めっきらもつきら どおんどん」における身体感覚の表現について

加藤純子
—名古屋芸術大学人間発達学部教授

多くの絵本は、一つの画面の中に絵と文章という異なった手法による表現を共存させている。それらは互いに補いあいながら、あるいは相乗的に表現効果を高めあいながら、読み手がお話の世界を頭の中に描くことができるように、読み手の想像力に働きかける。「絵本を読む」ということは、画面に直接描かれていることを手がかりとして、画面に直接かかれていない事柄まで想像し、迫真性をもって描いていくことなのだ。

絵本「めっきらもつきら どおんどん」（長谷川摂子 文 降矢なな 絵 福音館書店）は、遊ぶ相手が見つからなくて手持ち無沙汰な男の子が、口からでまかせの意味のない言葉に節をつけて歌ったことをきっかけとして大木の下にある異界で3人のばけものたちと楽しく遊んだ後、ばけものたちが眠ってしまってふと心細さを感じ、彼らの制止を振り切って地上に戻ってくる話である。

この絵本の文章は、散文と言葉のリズムを強調した文の2種類で書かれている。また、言葉のリズムを強調した文には、明らかに登場人物が実際に声に出して歌っていると判断できるものと、登場人物の気持ちを第三者が代弁しているのではないかと思われるものの2種類がある。

本研究では、言葉のリズムを強調した文のうち後者の文が書かれている画面に着目し、子どもの遊び歌のリズムや、絵の構図を手がかりとして以下の2点を明らかにする。

- ①言葉のリズムを強調した文と、その文が書かれている画面の絵の両方を併せて読むことによって読み手が描くことができるイメージは、周期運動によって興奮状態にある身体感覚であること
- ②登場人物の身体感覚に同期しやすい言葉と絵の組み合わせによって、読み手は、画面内の出来事を迫真性をもって描くことができるということ

A室 「絵本」を主軸にした異学科学生・教員の協働活動による実践教育に関して(1)
—父親の育児参加支援のためのものづくりワークショップから—

谷出千代子・山下明美
—仁愛女子短期大学教授・准教授

1. 問題の所在 平成17年4月から「次世代育成支援対策推進法」に基づいて、市町村・都道府県の行動計画、一般事業主・特定事業主行動計画の策定を義務付けた行動計画の実施となった。本研究では、県・市町村や事業主の行動計画を具体化するにあたり、実質的な対象となる父親がいかに育児参加に関心を示し、行動できるかというねらいに立脚し実践を試みた。特に、本学の学科専門性を生かしながら「絵本」を共通キーワードに、四専門分野（デザイン・情報教育・幼児教育・音楽）の教員と学生が、地域の子育て中の父親を対象に、積極的育児参加を導くための「ものづくりの研究と指導実践」を試みた。

先ず第1観点として、①「絵本」をキーワードにしたワークショップに興味を示し参加した父親像、及び②ワークショップを積極的に支援した学生の絵本に対する姿勢はどのように位置づけられるかについて検討していこうと思う。

2. 結果 ①当ワークショップ参加の有無からみた父親の「育児」に対する行動や考え方で差があった例として、年齢的に30代前半の父親で、子ども数が少ない、帰宅時間等が割合早く時間的にゆとりがあり、絵本の読み聞かせや入浴の援助なども積極的であるのが、参加したグループである。すなわち一人目の子どもの育児を目の当たりにして、育児参加の手段を希求している姿勢が見られた。ワークショップに2回以上参加した父親の「育児姿勢の変化」は、「絵本の読み聞かせ・手近な30分以内の声かけ相手をする」ことなどに変更の兆しがあった。そして具体的な要望、遊ばせ方、読み聞かせ絵本の選択などの要求が高かった。育児に取組み、具体的手段の欠落に気付く父親像があった。②学生の専門的・体験的のものづくりの育児支援に対する役割等は発表時に示す。

「文字なし絵本」における人称について

駒田賢一
— 聖和大学大学院 博士後期課程

通常、絵本は地の文において何らかの人称を設定して物語を展開させている。『大辞林』によれば、人称とは文法上の区別のひとつで、一人称（自称）・二人称（対称）・三人称（他称）に分けられる。物語との関係でいえば、一人称では発信者が物語の当事者であり、二人称では直接的関係の他者であり、また三人称では間接的に全体を把握し得る存在である。物語の発信源として人称のもつ効果は大きく、読み手に物語への特定の視点を提供するために、そのまま物語解釈の基礎となる可能性は非常に高い。したがって人称の統一は、物語展開を安定させることにも繋がる。

上述のように、物語の視点と文による人称表現とは緊密な関係にある。しかしながら、絵本には文字なし絵本といわれる、文字がまったく、あるいはほとんどない絵本も存在する。当然であるが、これら「文字なし絵本」には文による人称設定がない。絵では視点や視線が文法

でいう人称表現的機能は果たすものの、明確に対象を限定する文のそれとは全く同じ性格のものではない。『かさ』のようにかなり主人公を特定している作品であっても、主人公への視線以外に焦点を合わせることは不可能ではない。また『やこうれっしゃ』など複数の対象が同時に描かれる作品では、それが一層顕著になる。読み手が自分に見合った視点から考える事ができ、それぞれの経験や思考に合わせて物語を想像する。こうした物語解釈の多様性は、「文字なし絵本」の大きな特徴である。ただし「文字なし絵本」でも、人称と同等に物語の発信源となり得る視点を設定していなければ、読み手は物語を読み進めることはできないだろう。では「文字なし絵本」を読み進める際に、どのような人称、あるいは物語展開の視点が設定されているのか。本発表では、いくつかの作品分析と読みの事例を併せて、この「文字なし絵本」における人称の問題について考察を行いたい。

絵本における“行きて帰りし”物語構造に関する研究 —エッツ『もりのなか』、『わたしとあそんで』の考察—

生駒幸子

— 聖和大学大学院研究員

絵本は絵と言葉とで構築される総合芸術であり、時代、空間、文化を越えて様々な年代の人々に訴えかける力を持つ、可能性に満ちた表現メディアである。読者が幼い子どもである場合、文字を読み書きしない子どもでさえ、読み聞かせを通し、眼で絵を見て、耳からお話を聞くことによって、まさに絵本を「体験」している。では、絵本を体験するということは、幼い子どもたちにとってどのような意味をもたらすのであろうか。

瀬田貞二氏は、幼い子どもの発達しようとする頭脳や感情に働きに即した、いちばん受け入れやすい形のお話に、「行って帰ってくる (there and back again)」構造があると指摘した（『幼い子の文学』1980）。子どもの日々の生活をみていると分かるように、子どもは現実の世界で、実際に身体を動かして「行って帰ってくる」体験を重ねて成長していく。それと同時に、子どもたちは、絵本やお話などの想像の世界で、この「行って帰ってくる」体験もしていると思われる。すぐれた作家・画家

の本質を見極める眼によって、研ぎ澄まされて絵本という物語がうまれるのだが、子どもは、絵本のなかに、「いま、ここ」にある現実世界の文脈が昇華されたものとしての、“行きて帰りし”物語を見出しているのではないか。この“行きて帰りし”絵本の体験は、子どもたちが日々の生活をしながら、自分自身の物語をつむぎだしていることと密接につながっていると考えられる。

本発表では、このような想像世界における子どもの「行って帰ってくる」体験をシンプルに、かつ具体的に描いていると思われる、マリー・ホール・エッツの『もりのなか』、『わたしとあそんで』の2冊を検証することを試みる。さらに、物語における“行きて帰りし”という構造を、瀬田氏の論説から最大限に導き出しながら、絵本における“行きて帰りし”物語構造の特徴、またその構造を持つ絵本と子どもとの関係性を明らかにし、乳幼児期の子どもの発達にふさわしい絵本の質の問題にまで言及したいと思う。

絵雑誌「コドモノクニ」にみる子ども像

柴村紀代

— 藤女子大学教授

「コドモノクニ」は、1922年1月から1944年3月まで全285冊が発刊された。戦前を代表する芸術的絵雑誌として、岡本帰一、初山滋、本田庄太郎、清水良雄、川上四郎など後の絵本に大きな影響を与えた童画家がここを舞台として活躍した。従来の研究は個々の作家を取り上げたものが多いが、今回の発表はこれらの画家たちのそれぞれの特徴ではなく、誌面に描かれた子ども像が時代をどのように映しているかについて考察したい。

その方法として、誌面に描かれた子どもの遊びと仕事を中心に分析する。そこに、編集顧問であった倉橋惣三の生活を重視する保育理論の影響や、大正デモクラシーの時代背景がどのように誌面に反映されたかを検討したい。

なお、今回参照した「コドモノクニ」は、2005年函館市中央図書館が移転に伴い一部研究者に公開した「函館図書館児童雑誌コレクション」の中から、「コドモノクニ」129冊を対象とした。

北海道内での「コドモノクニ」の所蔵は、現在までほとんど確認されず、函館市中央図書館での所蔵が、今回初めて道内でまとまった量の資料として日の目を見ることとなった。

函館市中央図書館の所蔵内容は下記の通りである。

2巻8号（1923年8月）—16巻2号（1937年2月）（欠号あり）

今回の函館図書館所蔵の当資料を通して得た特徴を、今後の課題として、残りのコドモノクニについても検討したいと思っている。